06の講義内容

辞典を繙く　―その2　漢和辞典―

2007.06.06～2008.05.08更新

萩原　義雄

「東洋のエスペラント」と云うことばが示すように、嘗て「漢字」「漢文」は、文字による筆談であれば中国人でなくても日本人・朝鮮人・ベトナム人でも意思を疎通することができた。言語変動は、二千年という歳月でことばでの流通妨げるという。こうしたなかで外国語の文字でありつつも、さほどよそものと思えないのがこの「漢字」「漢文」であった。これは稲作民族である日本人が「米」やその他の五穀を大陸から伝え来て、日々の食生活〔味噌・醤油など〕に用いていることにも通じているからだ。将に自国生産物化していると言えよう。これ故に、今も「漢字」「漢文」の文明社会にある日本人の素養として、何時如何なる「漢字文献」資料に出会っても対峙できる素養を私たちは常に身につけてきた。

文字を習得した知識人たちは、古の日本では、「史」の官職を以て高待遇で朝廷に召し抱えられたからだ。その祖は大陸からの渡来人であり、この末裔が日本の文字社会に効験してきたことは否めない。

次に、中島敦著『文字禍』〔ちくま文庫刊〕という短編小説の一文を紹介しておこう。

「文字ノ精ガ人間ノ眼ヲ喰イアラスコト、猶、蛆虫ガ胡桃ノ固キ殻ヲ穿チテ、中ノ実ヲ巧ニ喰イツクスガ如シ」と、ナブ・アヘ・エリバは、新しい粘土の備忘録に誌した。

「文字ノ精ハ人間ノ鼻・咽喉・腹等ヲモ犯スモノノ如シ」と、老博士はまた誌した。

「文字ノ害タル、人間ノ頭脳ヲ犯シ、精神ヲ痲痺セシムルニ至ッテ、スナワチ極マル。」

獅子という字は、本物の獅子の影ではないのか。それで、獅子という字を覚えた猟師は、本物の獅子の代りに獅子の影を狙い、女という字を覚えた男は、本物の女の代りに女の影を抱くようになるのではないか。文字の無かった昔、ピル・ナピシュチムの洪水以前には、歓びも智慧もみんな直接に人間の中にはいって来た。今は、文字の薄被をかぶった歓びの影と智慧の影としか、我々は知らない。近頃人々は物憶えが悪くなった。これも文字の精の悪戯である。人々は、もはや、書きとめておかなければ、何一つ憶えることが出来ない。着物を着るようになって、人間の皮膚が弱く醜くなった。乗物が発明されて、人間の脚が弱く醜くなった。文字が普及して、人々の頭は、もはや、働かなくなったのである。

彼は、スメリヤ語やアラメヤ語ばかりでなく、紙草や羊皮紙に誌された埃及文字まですらすらと読む。およそ文字になった古代のことで、彼の知らぬことはない。…《中略》

書洩らし？　冗談ではない、書かれなかった事は、無かった事じゃ。芽の出ぬ種子は、結局初めから無かったのじゃわい。歴史とはな、この粘土板のことじゃ。

大マルズック星（木星）が天界の牧羊者の境を犯せば神々の怒が降るのも、月輪の上部に蝕が現れればフモオル人が禍を蒙るのも、皆、古書に文字として誌されてあればこそじゃ。古代スメリヤ人が馬という獣を知らなんだのも、彼等の間に馬という字が無かったからじゃ。この文字の精霊の力ほど恐ろしいものは無い。

今にして文字への盲目的崇拝を改めずんば、後に臍を噬むとも及ばぬであろう云々。

コラムその1

両河地方（メソポタミヤ）では埃及（エジプト）と違（ちが）って紙草（パピルス）を産（さん）しない。

と、「メソポタミア」「エジプト」「パピルス」の三語の洋語を「両河地方（メソポタミヤ）」「埃及（エジプト）」「紙草（パピルス）」と漢字で表記し、これに傍訓というかたちで記載する。上部の例文中に見える「牧羊者（オリオン）」も同じ語である。

この小説に引用されている「文字」は、人類全体が用いだした文字を指して云う。そして、この小説の根底には、「言霊」を信ずる日本人がなぜ、長い間文字文化を摂取しないでいたか、その要因を作者中島敦は物語っているのかもしれない。慥かに、文字は、何千里も離れた遠くの人と交信することができる。また、数百年前に実在した人物の遺したメッセージを知ることができるのである。やがて、古代日本の朝廷は、漢字という大陸の文字を真っ向から受容しはじめるのである。

ここには、仏教伝来（紀元前五世紀頃北インドで誕生した仏教は、シルクロードや中国大陸を経て、朝鮮半島に伝わり、六世紀になって日本列島に伝来する）の影響も大きく寄与している。この経典は、中国で漢訳された漢訳仏典である。「佛」「仏」の文字を音で「ブツ」と読み、これを訓じて「ほとけ」と読ませた。この訓読法は、朝鮮半島で取り込まれた読みを日本にもたらしたものであろう。「ホト」は漢字音、「ケ」は接尾辞で「氣」の意とも云われる（『日本国語辞典』第二版に「「ほと」はBuddha、さらに、それの漢訳「仏」の音の変化したもの、「け」は「気（け）」か。「け」については、霊妙なものの意とするほか、目に見える形の意で、仏の形すなわち仏像の意が原義とする説もある」とし、【補注】に、「語源についてはかならずしも明確でない。梵語Buddhaは中国では「浮屠」「浮図」などと音写され、後には「仏陀」と書かれることが多く、これらとの関連が考えられる。空海「性霊集」には、「仏陀」「仏駄」「没駄」「没度」などの表記が見られ、日本でも後にはBuddhaの音訳としては「仏陀」が一般化し、優れた修行者、特に仏教の開祖釈を指す語としてはこちらが用いられるようになった。」と記載する）。聖徳太子（上宮太子・厩戸皇子。）が仏教請来に貢献している。死後百年以上経った後にこの名前が用いられるのである。そして、数々の伝説をここに遺すことになる。ご存知であろう、遣唐使小野妹子を随に使わした時の国書に「日出ずる處の天子、書を日没處の天子に致す。恙なきや」（『隋書』倭國傳所載）などは実に鋭い文言の表現である。やがて、かの隋国よりはじめて日本に使者が訪れることになる。

聖徳太子の六〇四年に公布した「十七條憲法」（小島憲之説、陽の数九、陰の数八で極まりとし、陰陽世界の合体融合の意）は、『日本書紀』に収録されている。その第一條のところは、

〇夏四月丙寅朔戊辰、皇太子親肇作憲法十七條。一曰、以和爲貴、無忤爲宗。人皆有黨。亦少達者。是以、或不順君父。乍違于隣里。然上和下睦、諧於論事、則事理自通。何事不成。

とし、これを訓読するに、

一（ひとつ）に曰（い）はく、和（やはらか）なるを以て貴（たふと）しとし、忤（さか）ふること無（な）きを宗（むね）とせよ。人（ひと）皆（みな）黨（たむら）有（あ）り。亦（また）達（さと）る者（ひと）少（すくな）し。是（ここ）を以て、或（ある）いは君父（きみかぞ）に順（したが）はず。乍（また）隣里（さととなり）に違（たが）ふ。然（しか）れども、上（かみ）和（やはら）ぎ下（しも）睦（むつ）びて、事（こと）を論（あげつら）ふに諧（かな）ふときは、事理（こと）自（おの）づからに通（かよ）ふ。何事（なにごと）か成（な）らざらむ。

※『論語』学而「禮之用和爲貴」、『千字文』の「上和下睦、夫唱婦随」に類似する。

と訓読する。和漢訓読の特殊様式が此の後、本邦に根付くまでにはまだ多くの時間を必要としたことは云うまでもない。だが、飛鳥時代に花咲いた漢字文化は、このとき日本文明に奇跡的な高度成長をもたらしている。二度目は、江戸幕末から明治時代にかけてである。

最初の聖徳太子が再び二〇〇年後の聖武天皇に生まれ変わったと伝えるのもこのあたりに機縁があるのであるまいか。これと同じように一九世紀半ばに、西洋近代文明の象徴となった鉄の乗り物が列島を走った。このとき

日本人は多くの西洋語に出会うのだが、漢語の有する造語力により、これを美事に包括せしめている。日本語の最大の利点、概念語は漢語にし、情趣語は和語に委ねるという二段構えの文字言語構造が最大限に発揮されているのもこの時である。

次に、この近代漢字の造語力を見てみることにする。実際、幕末における漢文学習は、武士だけではなく、町人そして農民、博徒までもが学びをし始めている。

「郵便」に対し、「便郵箱」郵便箱をいう、盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧{一九一五年}〕

「鉄道」に対し、「道鉄」「てつどう（鉄道）」の倒語。鉄道をいう、盗人仲間の隠語。〔隠語輯覧{一九一五年}〕

「銀行」に対し、「行銀」×。

「智慧」に対し、「慧智」×「叡智」＊哲学字彙〔一八八一年〕「Intelligence　睿智」※凌雲集〔八一四年〕序〈小野岑守〉「睿知天縦、艶藻神授」

「華麗」に対し、「麗華」＊江都督納言願文集〔平安後〕二・法性寺常行堂供養願文「桃夭春濃。嘲三麗花於南陽之月二」

この種の文字について、二〇〇八年四月に青柳亨編『世相とことば』〔西田書店刊〕が、「「凸凹」と「凹凸」のちがいを皮切りに、四六五の逆さ熟語を調べ上げた蘊蓄のきわみ」と銘打って四六五種の語を紹介している。これらの語がどのような資料に基づくかを明記していないことは惜しまれるところでもあるが参照されたい。

漢詩・漢文そして現代の歌詞に学ぶ

室町時代の禅僧、一休禅師は、没後一〇〇年を経た江戸文化に迎えられ、『一休頓智咄』を創出する原動力となった。そして、現代では、アニメーション「一休さん」が登場する。この主題歌の終わりの「はははうえさま」〔『はははうえさま』（一九七五年）歌／藤田淑子　作詞／山元護久　作編曲／宇野誠一郎〕を聞いて、この文章を書き出してみよう。http://jp.youtube.com/watch?v=HKOpvoaN0ps&feature=related

はははうえさま　お元気ですか
ゆうべ杉のこずえで
あかるくひかる星ひとつみつけました
星はみつめます　はははうえのようにとても優しく
わたしは星にはなします
くじけませんよ 男の子です
さびしくなったら はなしにきますね　いつかたぶん
それではまた　おたよりします
はははうえさま　いっきゅう

この歌詞は、「言語の形態分析」をするまでもないが、実に日本的情趣を醸しだしていることに気づく。

はははうえ／さま／お／**元気**／です／か／ゆうべ／杉／の／こずえ／で／あかるく／ひかる／星／ひとつ／みつけ／まし／た／星／は／みつめ／ます／はははうえ／の／ように／とても／優しく／わたし／は／星／に／はなし／ます／くじけ／ませ／ん／よ／男／の／子／です／さびしく／なっ／たら／はなし／に／き／ます／ね／いつか／たぶん／それ／では／また／お／たより／し／ます／はははうえ／さま／**いっきゅう**／

この歌詞には漢語は「元気」そして最後の固有名詞「一休」の二語にすぎない。多くは和語で構成されていることに気づくであろう。

和語名詞　「母上」「夕」「杉」「梢」「星」「私」「男」「子」「便」

〔接辞〕「御」「様」
和語代名詞　「其」
和語数名詞　「一」
和語動詞　「光」「見付」「見詰」「話」「挫」「成」「来」「為」
和語形容詞　「明」「優」「寂」
和語副詞　「迚」「何時」「多分」
和語接続詞　「又」
助詞　「か」「の」「で」「は」「に」「よ」「ね」「たら」
「では」
助動詞　「です」「まし」「た」「ます」「ように」「ませ」「ん」
ここで、和語名詞を漢字表記して、ただ漢字羅列文を試みると、
母上様御元気歟。夕杉之梢明光星一見付。星者見詰。母上様迚優私者星話。不挫男子。寂成話来。何時多分。其又為御便。母上様。一休
となり、少しは漢文に近づくのである。こうした文章を「漢式和文」と云う。このような内容の文章で筆談すると、どの程度理会が深められるかは二の次として、私たちはこの文章の反対側にもう一つの高品質な漢字概念で心を伝える力を有していることを忘れては成るまい。

《コラム1》「ほとけ」の「け」は「なさけ」の「け」と同じ
他動詞「なす」の名詞形が「なさ」で、これに「け」が付加され「なさけ【情】」となる。「なさけを見せる」「なさけを交わす」と表現する。この「け」は形を意味する。「佛像」「佛画」「掛け軸に描いた佛」など。

《コラム2》「宮内庁非公認一休さん検定試験」って知ってますか？
http://ikkuusan.hp.infoseek.co.jp/cgi-bin/quiz200/tqindex.cgi
「ははうえさま」の二番の歌詞
ははうえさま　お元気ですか
きのうお寺にこねこが
となりの村にもらわれていきました
こねこはなきました　かあさんねこにしがみついて
わたしはいいました
なくのはおよし　さびしくないさ
男の子だろ　かあさんにあえるよ　いつかきっと
それではまた　おたよりします
ははうえさま　いっきゅう

《課題》右の「ははうえさま」の二番の歌詞を、ご自分も言語形態解析してみよう。更に、和語名詞を漢字表記した和式漢文の文章を作成してみよう。